

e シンキング (ひとづくり広域連合政策情報メルマガ) 第 26 号
2006 / 12 / 15 発行 (月 1 回発行)

各職員に、転送または配布をお願いします。

【 目 次 】

今月のトピックス 「リバースモーゲージ」

現場レポート 「自治大学校の魅力について」(投稿レポート)

第 25 回明治大学社会科学研究所シンポジウム
「まちおこしと大学・地域の教育力」

私の選んだこの 1 冊 「考えないヒト ケータイ依存で退化した日本人」
(正高信男著 / 中央新書)

今月のトピックス

- - - 「リバースモーゲージ」 - - -

先月 29 日、厚生労働省は国費ベースで約 2 兆円の生活保護費を来年度予算で約 400 億円削減する方針を固めたと発表しました。この方針を具体化するための方法の一つとして、持家居住して生活保護を受給している高齢者(65 歳以上)への給付をやめ、自宅を担保に生活資金を貸し付ける「リバースモーゲージ」制度を導入していくとありました。

リバースモーゲージとは、居住しながら自宅を担保にして、自治体や金融機関などから融資を受ける「長期生活支援資金貸付」制度で、利用者の死亡後に担保物件を処分して清算する仕組みで、資産担保年金・住宅担保年金とも呼ばれています。日本では、1981 年に東京都武蔵野市が福祉制度として導入したのが最初といえます。

現行の生活保護制度では、居住用不動産の評価額が概ね 2300 万円以下であれば生活保護を受けることが可能(他条件にもよる)となっています。この

2300万円という金額は、標準3人世帯（夫33歳・妻29歳・子4歳）の生活扶助＋住宅扶助の10年分という基準のもと算定される金額になっていますが、「概ね」とつけているのは、この標準3人世帯の扶助金額が地域によって異なるためです。

新制度の対象は65歳以上の高齢者で、制度を利用しなければ保護の必要が生じると福祉事務所が認めた者になります。実質的には「評価額500万円以上～概ね2300万円」が対象物件となり、他の債権担保になっていないことが条件となります。

上記のような条件を満たす場合には、評価額の7割（集合住宅の場合は5割）を限度に、毎月生活扶助基準の1.5倍以内で貸し付けるといいます。また、評価額は変動することもあるため、3年ごとに見直され、時点毎の適切な調整を行っていくといえます。仮に利用者が生存中に限度額に達し、生活に困る状態なら、生活保護に切り替えることとしています。

実際には不動産評価額500万円以上の居宅を所有する生活保護申請者（利用希望者）はそれほど多くないという指摘もあるようですが、この制度は年間数十億円程度の歳出削減効果があると厚生労働省では見込んでいます。（B）

現場レポート

「自治大学校の魅力について」

自治大学校第1部課程106期 熊谷 元一郎（埼玉県職員）

半年にわたる宿泊研修は自由な時間も少なく、精神的にも身体的にも非常にキツイのではと心配していましたが、卒業して振り返ってみると、様々な刺激を受け、得るものも多く、とても有意義な時間を過ごすことができました。

個別の講義は、自治体職員に必要とされる様々な法律関係の内容を基本としたもので、各分野の第一線で活躍されている方を講師として招いていただき、非常に充実したものでした。分野や内容も多岐にわたり、これほど多数の著名な講師を集めて行う研修は他に例がないと思われます。法学部出身でなく、これまで法律を体系的に学んだことのない自分にとって、理解の程度は別にして、集中的に知識を習得できたことは貴重な経験でした。

また、以前のカリキュラムと異なる点として、これからの地方分権を担う自

治体職員に求められる政策形成能力の養成に力を入れている点が挙げられます。特に、5人程度の小グループで、地方自治行政の経験豊富な教官の指導の下、地方自治体を取り巻く様々な課題について政策提言をまとめる「政策課題研究」は、多くのカリキュラムの中で最も内容の濃いものでした。最終的にまとめられた提言内容は、学術的に優れたものから稚拙なものまで様々なレベルでしたが、その内容云々以上に、自由な立場で仲間と議論することの大切さを学びました。

日常の寮生活では、同じ階のフロアメンバーや仲間達に支えられ、たくさん助けられ、時には励まされ、楽しく過ごすことができました。また、サークル活動も盛んで、テニスや野球、ジョキング、茶道、民謡、合唱・・・各々が楽しい時間を過ごしていました。学校内での様々な機会を通じて、全国各地の仲間と知り合い、多くを語り合えたことは大切な財産です。106期の卒業式では、自治会で学籍番号とネーム入りのキャップを作り、まるで映画のワンシーンのように、卒業生全員が天井に向かって帽子を放り投げ、お世話になった先生方へのお礼、寝食と苦楽を共にした仲間との別れを惜しみました。

この研修を通じて培った様々なつながりを大事にしながら、日々の仕事に取り組みたいと思います。

第25回明治大学社会科学研究所シンポジウム

「まちおこしと大学・地域の教育力」(2006/10/21 PM1:00～4:00)

このシンポジウムは、文部科学省が公募する、平成17年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」に採択された明治大学商学部の「広域連携支援プログラム-千代田区=首都圏ECM(Education Chain Management)-」の具体的な取組みを中心に、第1部は基調講義及び活動報告、第2部はパネルディスカッションという構成となっていました。ここでは、第1部の内容についてご紹介したいと思います。

第1部では、以下のような内容で基調講義がありました。

- | | | |
|-----------------------------------|------|------------------|
| 『まちづくりは市民力、わけても文化力』 | 石川道政 | 岐阜県美濃市長 |
| 『市区町村連携による相互経済の活性化』 | 水野勝之 | 明治大学商学部教授 |
| 『「三浦市東京支店なごみま鮮果」における
大学生の店舗経営』 | 熊澤喜章 | 明治大学商学部助教授 |
| 『“まち”は実践の学び舎』 | 菊地匡文 | 横須賀商工会議所
事務局長 |

石川美濃市長から、美濃市は平成の大合併の際の住民投票で「反対」という結果を尊重して単独の道を選び、「主役は市民」という基本理念の下、まちの持つ自然や伝統・文化などの資源を生かした、スローライフにふさわしい持続可能なまちづくりを推進していると話がありました。そのために、市民参加の環境づくりや、市内の多様な主体と連携した特色のある学校教育、「うだつの上がる町並み」などの既存施設の活用などの取組みを行っているという紹介がありました。

そうした取組みを通じて多くの市民が積極的にに関わり、「市民力」を向上させてきたといいます。市民力があれば、行政は黒子に徹すればいいというスタンスを持つ市長は、今後の取組みとして、市民がのびのびと活動できるよう、資金・人・場所の支援を行いながら、そこに大学などの多様な主体の持つ資源を融合し、オンリーワンのまちづくりを推進していきたいと語っていました。

水野教授、熊澤助教授からは明治大学商学部の現代G Pを中心に、この取組を通じて大学として何をを目指すのかという講義がありました。

G Pとは、大学等が実施する教育改革の優れた取組(Good Practice)のことをいい、その目的は、文部科学省がその優れた取組を選び、支援するとともに、広く社会に情報提供を行い、他の大学等がそれらを参考にし、教育改革への取組みを促進することです。このG Pには「特色ある大学教育支援プログラム(=特色G P)」と「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(=現代G P)」の2種類があり、現代G Pは社会的要請の強い政策課題(地域活性化への貢献、知的財産関連教育など)に関するテーマについて、各大学等からの応募のうち、優れた取組みを選定していくという概要となっています。

水野教授は、採択された「広域連携支援プログラム」の担当教授で、このプログラムでは、「大学の教育力」が地域社会に貢献すると同時に「地域の教育力」で学生を育てるという相互の関係を実現することを目的とすると説明がありました。具体的にはサブタイトルのあるように、千代田区=首都圏各地域の「=」の部分に学生が入り、その若い力を接着剤に地域間の経済的連携を促し、広域での問題解決を試み、首都圏広域経済の活性化を図るといふものです。

熊澤助教授から、商学部2年生で構成されるゼミ生が店舗経営する「三浦市東京支店 なごみま鮮果」の取組みについて紹介がありました。この店舗は神田駅南口の空き店舗を活用したもので、三浦市のシティセールス、街の活性化(地域住民への貢献)、経営(マーケティング)教育の実践という3つの目的により実現したといいます。『学生という「よそ者・若者・ばか者」が、地域に気づきを与えることが可能であり、また学生自身も店舗経営を通じて、商品の向こうに見える「人」に気づきを与えられ、日々成長している』と述べていました。

大学として何を指すのかについては、水野教授より、その方向性について、『大学は地域の情報を集約し、それらをどのように調理していくか、それが大学組織の役割になるだろう』と述べていました。さらに今後は、卒業生が何らかのアウトプットを出せるような教育を目指していくことも重要となるとも付け加えていました。(B)

私の選んだこの1冊 「考えないヒト ケータイ依存で退化した日本人」
(正高信男著 / 中央新書)

筆者は、これからの人間像を「ケータイ主義的人間」と命名する。社会の情報化の最たるものがケータイの普及であり、私たちの生活スタイルは、従来であれば脳を使って行っていた知的作業を、そっくりケータイに移管するようになる。

ところが、IT化によって、人間はむしろ非人間化しつつあり、日本人は、近年になって急速に生活スタイルを「サル型」へと変化させているという。

コミュニケーションの仕方について、人間の言語による意思疎通は相手の心を読む(発話を手掛かりに心理を推測する)過程であるが、最近の日本人はことばのメッセージを記号として把握するサルのスタイルへ先祖返りしている。

感性情報をケータイメールの「かお」アイコンで伝えるように、視覚情報に依存したコミュニケーションにおいては、言語を使用する場合のように心や脳を使わないようになる。ことばを操っての情報処理によらず、即時的な判断をする人間が「キレ」やすい人間であるが、筆者はケータイの普及によってこうした「キレ」やすい人間が増えるとしている。

この他に、しょっちゅう外をほっつき歩いて生活する「出あるき人間」が、ケータイの普及に伴って激増しているが、この「出あるき人間」の日常は、パーティで離合集散しつつ遊動・採食を行うチンパンジーと類似していること、「自分というものがわからない」人が増えているのも、IT化によって私たちは多くの他人と「つながる」ことができるようになったものの、他者との関係の中で「私とは何か」を把握しづらくなり、「私」というもの自体がとらえどころのないものに変質してしまったこと、など様々な社会現象が紹介されている。

IT化のあまりに急速な進行は、「ケータイやメールが普及して便利になり

ました」では片付けられないマイナスの影響（人間の思考力が衰退すること、
キレイやすい人間が増えていることなど）をも招いていること、情報化はこの先
も進んでいくだろうが同時にその悪影響もまた深刻になるだろうと考えさせら
れました。（江）

=====

ご意見・掲載希望

今月号のeシンキングはいかがでしたか？今月号では、上記「自治大学校の
魅力について」、熊谷さんより投稿をいただき、ありがとうございました。
こうした記事の投稿、皆様からの参加レポート、情報提供を随時募集していま
す。「これは記事になるかな？」というものがありましたら、お気軽にご連絡
ください。また、記事に対するご意見ご感想がありましたら、下記担当までお
寄せください。

[eシンキング / 毎月15日発行]

発行元

彩の国さいたま人づくり広域連合 政策管理部（小澤・江森）

〒331-0804 さいたま市北区土呂町2-24-1

TEL:048-664-6681 FAX:048-664-6667

WebPage: <http://www.hitozukuri.or.jp>

E-Mail: jinzai03@hitozukuri.or.jp

=====